

ドストエフスキーの作品から

処刑寸前から生還した文豪が語る「死刑」

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

ロシアの文豪ドストエフスキーは、『罪と罰』・『カラマーゾフの兄弟』・『悪霊』などの長編小説で日本人にも大変親しまれている作家です。その彼が二十八才の時、ある政治事件で逮捕され裁判にかけられて死刑判決を受けました（ペトラシエフスキー会事件 一八四九年）。刑場に出た彼は、銃殺刑直前に皇帝の恩赦が出て処刑を免れましたが、三十秒後の確実な死と直面した時の体験を小説『白痴』の中で次のように書いています（少し長いですが引用します）。

☆☆☆

「……まあ、ひとつ考えてみてください。たとえば、拷問ですがね。この場合は、その苦しみも傷も、すべて肉体的なものです。ですからそれはかえって心の苦しみをまぎらしてくれるんです。ですから、死んでしまうまで、ただその傷のためにだけ苦しむわけです。でも、いちばん強い痛みというもの、きつと、傷なんかのなかにあるのではなくて、あと一時間たったら、十分たったら、いや、三十秒たったら、いまにも魂が肉体から脱けだして、もう二度と人間ではなくなるんだということを、確実に知る気持ちのなかにあるんですよ。肝心なことはこの『確実に』という点ですよ。

いいですか、頭をこうやって刀の下において、その刀が頭の上へするとすべってくる音を耳にする四分の一秒こそ、何にもまして恐ろしいんですよ。……殺人の罪で人を殺すこと（死刑）は、当の犯罪よりも比喩ものにならないくらい大きな刑罰です。判決文を読みあげて人を殺すことは、強盗の人殺しなんかと比喩ものにならないくらい恐ろしいことですからね。

夜の森などで強盗に切り殺される人は、最後の瞬間まで、かならず救いの希望をもっているものなんです。もう喉を切られていながら、当人はまだ生きる希望をもっていて、逃げたり、助けを求めたりする例はいくらでもあるんです。ところが、死刑では、それがあれば十倍も楽に死ぬるこの最後の希望を、確実に奪い去っているんですからねえ。そこには判決というものがあるって、もう絶対にのがれられないというところに、むごたらしい苦しみのすべてがあるんです。いや、この世にこの苦しみよりもひどい苦しみはありませんよ。

……ひよっとすると、死刑の宣告を読みあげられて、さんざん苦しめられたあげく、『さあ出ていけ、お前はもう許されたんだ』と言われた男がいるかもしれません。いや、そういう男なら、きつと、その苦しみを話してくれるでしょうよ。この苦しみとこの恐ろしさについてはキリストも語っておられますがね。いや、なんとしても、人間をそんなふうにするのはよくありません！」

（新潮社刊 木村 浩訳）

☆☆☆

この綾瀬のすぐ近くの東京拘置所に三〇余名、全国では六〇名を超える死刑確定囚がいます。彼ら（彼女ら）は日々「明日、死刑が執行されるかもしれない」という状況におかれています。日本では、執行される当日の朝、看守から「今日でお別れだ」と本人に告げられる、世界でも他に例を見ない制度の中で、死刑囚は暮らしています。

ことによると、日本の死刑囚は、先に引用したドストエフスキーの体験と告白よりも、過酷な条件におかれているのかもしれません。